ドイツの教師・メランヒトンの思想構造

－人文主義と宗教改革－

菱　刈　晃　夫

はじめに

2017年は宗教改革500周年に当たる。周知のように1517年、ルター（Martin Luther,1483-1546）による悔い改めと贖宥に関する「95箇条提題」（贖宥の効力を明らかにするための討論 Disputatio pro declaratione virtutis indulgentiarum）が最初のきっかけとなり、それから宗教改革（Reformation）は一気にドイツ、そしてヨーロッパ、さらにはアメリカ大陸へと広がっていった[1]。ただしユングも指摘しているように、ただルターのみによって宗教改革が開始されたわけでも、また拡大していったわけでもない。彼はその嚆矢となりはしたが、そこに至るまでにはすでに長い歴史的蓄積と、その後も彼を支える協力者が多くいたのである。無論それに対抗する内外の多くの敵たちも。

> ルターなしに宗教改革はなかったでしょうが、彼一人では改革は実現できなかったでしょう。当初から彼には支持者と後援者がいましたし、宗教改革を成功に導くためには彼らが必要でした。支持者、後援者としてヴィッテンベルクに、またドイツとヨーロッパの多くの地域に協働する宗教改革者たちがいました。ヴィッテンベルクの宗教改革には一人の、近年言われるところでは二人の指導者がいました。ルターとメランヒトンは共に働き責務を分かち合いました[2]。

「ドイツの教師」（Praeceptor Germaniae）と当時から尊称されたメランヒトン（Philipp Melanchthon, 1497-1560）こそ、ルターの右腕として宗教改革運動に協力したもうひとりの宗教改革者である[3]。

しかし後に人文学の王者といわれたエラスムス（Erasmus von Rotterdam, 1466/69-1536）とルターとのあいだで起こる自由意志に関する論争を見ても分かるように[4]、このなかでメランヒトンがとったスタンスからしても[5]、第一の宗教改革者であるルターとその有力な協力者であるメランヒトンとのあいだには、当然のことながら性格や思想の違いが見出される[6]。というのもメランヒトンは、まず人文学者（Humanist）であり、人文主義による教育の成果である人文主義的教養（humanitas, Bildung）を骨の髄まで身につけた教師であったから[7]。

とはいうものの、ここでかつて行われてきたように人文主義（Humanismus）と宗教改革とを単純に対立するものとして捉えるのは誤っている。ギリシア・ローマの古典古代作家の原典に回帰し、これを原点にして「人間的なるもの」（humanum）―生まれながらの「人間らしさ」ではなく、それを欠いては人間とはいえない本質的なもの―「教養」としての人間性を高めようとする学問運動（ルネサンス）と宗教改革とは、決して相容れないものではなく、むしろこうした人文主義運動としてのルネサンスがあったからこそルターによる宗教改革は可能になった[8]。まさに「エラスムスが卵を産み、それをルターが孵した」のである[9]。

本稿では、まずは人文学者として1518年21歳の若さでヴィッテンベルク大学に招聘され第二の宗教改革者となるメランヒトンの思想構造とその特質を解明したい。はじめにメランヒトンの修学期にさかのぼりつつ、ヴィッテンベルク大学に教授として就任した際の演説の内容から、彼の特に教育思想の要点を明らかにする。この時期に人文学者としての基礎が形成される。次にルターおよびその神学との出会いによって生成されてくるメランヒトンの特に神学思想の要点を明らかにする。この時期には宗教改革者としての核心が形成される。最後に人文主義と宗教改革が統合されたメランヒトンの思想の全体的構造とその特質を明らかにすることで、今後の研究のための見取り図を示したい。

1節　メランヒトンの修学時代と教授就任演説
―人文学者としての基礎形成―

メランヒトンは1497年2月16日ブレッテン（現在では大都市カールスルーエの近く）に生まれた。メランヒトンの詳しい伝記については他に譲るにせよ[10]、元の名をPhilipp Schwartzerdtという。このシュヴァルツェルトというドイツ語名が、後に人文学者ロイヒリン（Johannes Reuchlin, 1455-1522）によってギリシア語化され、フィリップはメランヒトンと名乗るようになった。ただし自身は短くメラントン（Melanthon）とするのが常であった[11]。幼くして父と父母とを亡くし、彼は1508年より近郊プフォルツハイムにあったラテン語学校に通うことになるが、そこで寄宿していたのがロイヒリンの妹エリーザベト（Elisabeth Reuchlin : Els Reuchlerin, ca.1470-ca.1545）の家であった。彼女は母方の親戚であった。エリーザベトはメランヒトンの母方につながる男性と婚姻関係にあり、ゆえにロイヒリンとメランヒトンは血縁関係にはなかったが、しかし彼は才能あるフィリップのことを親戚として可愛がり、1509年3月15日にギリシア語文法書とともに「メラン‐ヒトン」（シュヴァルツ‐エルトというドイツ語では「黒い」「土地」を意味する言葉のギリシア語訳）を彼に贈ったのである。

すでにブレッテンで幼少期を過ごしていたときからメランヒトンの知的才能に

親たちは気づき、フィリップは町のラテン語学校に通い、かつプフォルツハイム出の家庭教師ヨハンネス・ウンガー（Johannes Unger, ca.1485-1553）によってラテン語の基礎基本を徹底して厳しく叩き込まれた[12]。1508年に父と祖父とが相次いで他界すると、彼は弟たちとともにプフォルツハイムのエリーザベトのところへと送られた。というのもここには当時より名高いラテン語学校があり、やはり優秀な教師ゲオルク・ジムラー（Georg Simler, ca.1475-1535）がいたからである。彼は後にテュービンゲン大学教授となり、メランヒトンと再会することになる。ジムラーは同僚ヒルテブラント（Johannes Hiltebrand, ca.1480-1513）とともに人文学者であって当時の改革的な教育法で知られたヴィンプフェリング（Jakob Wimpfeling, 1450-1528）に従いメランヒトンを教育した。メランヒトンは特にギリシア語をよく学んだ。ここにはエリートたち、たとえば後に宗教改革者となるヘディオ（Caspar Hedio, 1494-1552）、イレニクス（Franciscus Irenicus, 1494-1553）、エルプ（Matthias Erb, 1495-1571）らがいた。メランヒトンの親友には4歳年上で農民出のグリュナエウス（Simon Grynaeus, 1493-1541）がいて、後にハイデルベルクとバーゼルで秀でたギリシア語教授となる。11歳とメランヒトンは最年少であったが、もっとも才能にあふれていた。彼はすぐに初心者に対して教育的世話をやくこと―教育的指導―を許可されている[13]。

次いで1年ほどでメランヒトンはプフォルツハイムのラテン語学校を後にし、1509年10月14日付でハイデルベルク大学に12歳で学籍登録する。ハイデルベルクでは教授であったシュパンゲル（Pallas Spangel, ca.1445-1512）の許に住まい、ジムラーやヒルテブラントそしてシュパンゲルら師たちと同じく古い方法（via antiqua）に従って所定の学業を修めた[14]。シュパンゲルのところには、かつてハイデルベルクで教えたヴィンプェリングが立ち寄ることもあった[15]。メランヒトンは学芸課程を最短で修了し、1511年6月10日に14歳で学芸学士（Baccalaureus artium）となる。

それから1年ほど彼はハイデルベルクに留まるが、おそらく師ジムラーの死去（1512年7月17日）もあって、今度はテュービンゲン大学に1512年9月17日付で学籍登録をした。そして1514年1月25日メランヒトンは17歳で学芸修士となった。ここではハイデルベルクとは異なり新しい方法（via moderna）によって学修を終えた。テュービンゲンでのメランヒトンの主要な活動はやはりギリシア語にあり、すでに自身もギリシア語を教えていた。学芸課程での最高学位であった修士号を取得の後2年で神学学士になることも可能であったが、メランヒトンは学芸学部での諸学科ならびに古典作家の研究に打ち込んだ[16]。さらに数学や天文学および占星術をシュトゥフラー（Johannes Stöffler, 1452-1532）から学び、後の教育思想の基礎を形成している。ロイヒリンとも親交を保ちつつ、1516年には最初の学術的業績であるテレンティウスの喜劇への導入を執筆。この頃よ

りエラスムスとも文通するようになり、エラスムスもまたメランヒトンのことを高く評価していた。ルターとエラスムスとのあいだでの論争を超えて二人は文通し続けている[17]。宗教改革者となるブラーラー（Ambrosius Blarer, 1492-1564）やエコランパド（Johannes Oekolampad, 1482-1531）とも交友を重ね、とりわけ15歳年上の後者からは1515年ルーヴェンで死後発行された人文学者アグリコラ（Rudolf Agricola, 1444-1485）の弁証法を寄贈された。アグリコラは神学の学位取得とエラスムスの新約聖書の刊行を手伝うためにバーゼルへ向かい、そこからメランヒトンがスコラ論理学を克服し、2節で述べる『ロキ』で採用する方法に役立つ、この重要な書物を送付したのである[18]。プフォルツハイムでの学友イレニクスがハーゲナウで大作『ドイツ史』（Exegesis Germaniae）を出版する際にもメランヒトンは手伝うが、すでにナウクレルス（Johannes Nauclerus, 1425-1510）の世界史の出版にも協力し、彼は歴史に関する根本的な知識を獲得している。後に歴史もまたメランヒトンにとって重要な教育科目のひとつとなる。恩師シュトゥフラーに捧げられた「自由学芸について」（De artibus liberalibus, 1517）と題する講演の通り、まさにテュービンゲン時代は人文主義に基づくメランヒトン思想の基礎が形作られた時代であり、すでにこの時期にヴィッテンベルクに来て早々に出版されるギリシア語文法や、修辞学に弁証法のほとんどが準備されていたと考えられる[19]。他にも数多くの実りを携えて[20]、1518年メランヒトンはルターとともに臨終の地となるヴィッテンベルクへと赴く。テュービンゲンには18年後に一度だけ訪問しただけとなる。

1502年にフリードリヒ賢公（Friedlich der Weise, 1463-1525）[21]によって設立されたヴィッテンベルク大学はギリシア語やヘブライ語そのほか学芸課程に属する数名の教師を募集していた。フリードリヒはロイヒリンを呼ぼうとしたが老齢もあってかなわず、もちろん彼は親戚でもあるメランヒトンを、エラスムスを除いてメランヒトンよりも優秀な者はいない、と推挙した。そして1518年8月25日メランヒトンは運命の地ヴィッテンベルクに到着。来る日曜日の8月28日―後にルターとともにメランヒトンも眠ることになる―城教会で「青年の学習改善について」（De corrigendis adolescentiae studiis）と題して教授就任演説を行った。外見は小柄で華奢なメランヒトンであったが、その演説は形式および内容ともに人々、とりわけルターに感銘を与えた。メランヒトンは、ギリシア語はもちろんのことテュービンゲンでの人文主義時代に身につけた数学や歴史などさまざまな成果を、いわばヴィッテンベルク大学への嫁入り持参金のようにしてもたらした（Mitgift seiner Tübinger Humanistenzeit）[22]といえよう。そこで最初のテーマとして選ばれたのが、大学での学習課程すなわちカリキュラムの改革であった。その後ヴィッテンベルク大学のカリキュラム改革は、ルターおよびメランヒトンの教育思想をベースに時とともに進められていくが[23]、この演説にはその基本方

針が明確にされている。メランヒトン教育思想の基盤にある特徴を見ておこう。

やはり第一にメランヒトンは人文主義（フマニスムス）に沿った教育改革を提起する。それは古典古代のよき文学（bonae litterae）へと、その原典および源泉へと（ad fontes）還ることを第一に要請する。文字もしくは言葉として記された原テキストに還ることは、哲学においても神学においても同じである。一方はホメロスやアリストテレスやキケロ等々の原典へと、他方はヘブライ語やギリシア語で記された聖書の原典へと還り、原点から内容を読解していくことが求められている。

ちなみに、もちろんルターはこのことを痛感していたので、すでにロイヒリンの著作からヘブライ語を学び、エラスムスによるギリシア語原本を頼りに新約聖書を読み解こうとしていた。ゆえに彼らを含めルター自身も「聖書人文主義者」（Bibelhumanisten）のひとりといえる。すでにルターはエアフルト時代より人文主義的な専門教育を受けていた[24]。よって人文主義と宗教改革とを対立的に捉える19世紀的な見方は歴史的現実からすれば誤りであり、むしろ人文学者あるいは人文主義者であるとともに宗教改革者（Humanist und Reformator）であることに何ら矛盾はなく、とりわけメランヒトンにおいてはトレードマークであるとさえいえる[25]。ともかくad fontesはメランヒトンの就任演説の基本主張であるが、ただし決してメランヒトン独自の真新しいものではない。そもそも、すでにそうした人文主義的精神によってヴィッテンベルク大学を改革しようとしたからこそ、メランヒトンが招聘されたからである。シャイブレが述べるように、まさにメランヒトンは開かれた扉から堂々入場していったのである[26]。

中世のスコラ学や、事物そのものというよりも事物に関する二次文献や、解釈のまた解釈のような不透明な濃霧のなかから学生を連れ出し[27]、学問の本質―原典―へと立ち戻らせることがメランヒトンの教育改革の最大のねらいであって、伝統的な自由学芸や学科といった枠組みを蔑ろにしようとは考えていない。そこで、こう述べる。

> 学芸の種類には全般的に3つ、論理学、自然学、倫理学があります。論理学（logicum）は概して話（言葉）（sermo）の意味や区別を扱い、これによってより高度のものに至るのですから、最初に教育されなければならない子どもへの手ほどきとなります。これは文字を教え、言葉の正確な意味あるいは規則をまとめ、または作家から実例を集め、考察すべきことを示しますが、それはほとんど文法（grammatica）が明らかにするのと同じものになります。それから少し進歩したら、精神に判断力が備わります。これによって事柄の基準、起源、目的、経路といったものが認識できるようになり、すると何が起ころうとも的確に対処できるようになります。これら教えに属するすべてを、あなたたちはほとんど現金のようにして持っていて、学芸の助力によっ

て聴衆の心を捉えれば、わけもなく矛盾はできなくなります。この学芸の役割を、私たちは弁証法、そして修辞学と呼んでいます。確かに権威者によって名称はさまざまですが、同一の学芸です[28]。

何よりもまず言葉のトレーニングすなわち自由学芸の筆頭にある文法から開始されなければならない。むろんラテン語、ギリシア語、そしてヘブライ語である。そして修辞学に弁証法つまり論理学[29]。とりわけギリシア語の軽視[30]、数学の無知、神学の荒廃は同時的に進行している（simul Graeca contempta, mathematica deserta, sacra negligentius culta sunt）[31]。

またメランヒトンは刷新された原典に基づく言語教育とあわせてテュービンゲンで学んだ歴史、数学、天文学の重要性を説いている。メランヒトンによれば、特に歴史は太陽と同じように人間の生活には必要である。というのも私的にせよ公的にせよ人生にとって、また司法や政治にとって、これらは有益な実例を今日に伝えてくれるからである。

こうしてメランヒトンもまた人文学者としての基礎を形成しながら、宗教改革という世界史に連なる輝かしい1ページに記されることになったのである。

2節　聖書学士から『ロキ』へ―宗教改革者としての核心形成―

ギリシア語ならびにギリシア文学の教授としてヴィッテンベルク大学に赴任したメランヒトンであるが、新約聖書の読解も当初より加わっていた[32]。まずはイリアスやテトスへの手紙から講義は開始され、そのためにメランヒトンはギリシア語からのテキストを作成させた。その後プルタルコスやピンダロスからの抜粋版テキストが続き、おそらくヤコブの手紙も加わる。そしてローマの信徒への手紙やガラテヤの信徒への手紙がギリシア語の初心者向けのために取り上げられた。1518年にはギリシア語文法、1519年には修辞学、1520年には弁証法のテキストが出版されるが、これらはすでにテュービンゲン時代に用意されていたものである。ウェルギリウス、アリストファネス、ルキアノス、キケロ、ヘシオドスなどをメランヒトンは学生とともに勤勉に読解していった。

ギリシア語やギリシア語文献のテキストだけではない。フィロローゲとしてメランヒトンはヘブライ語の講座も担当せざるをえなかった。メランヒトンとほぼ同時に赴任したヘブライ語学者が三月ほどで辞めてしまったからである。彼はヘブライ語聖書とサロモンの箴言とを原典から読解していった。その後の後任も長続きせず、メランヒトンはヘブライ語文法などを教えざるをえなかったが、こうしたギリシア語のみならずヘブライ語の知識は、後にルターによる聖書のドイツ語訳の際にも大きな助けとなる。ユングも指摘しているように、ルターの偉業と一般には受け入れられている聖書のドイツ語訳であるが、元来「ルター - メラン

ヒトン聖書」というほうが史実としてはふさわしい[33]。

さて学芸学部の教授として、また学芸修士として精力的に研究および教育に打ち込むメランヒトンは、さらに当時として普通であった習慣に従い、さらに上級の学部で研究することになる。むろん神学部であり、後にメランヒトンは「私はルターから福音を学んだ」と感謝の念をもって振り返っている[34]。1519年9月19日に彼は聖書学士（Baccalaureus biblicus）の学位を取得する。学位取得の際に掲げられたメランヒトンの提題のなかで特に注目すべき4つをあげておこう[35]。

16. キリスト者にとっては聖書という証人以外のものをさらに信じる必要はない。
17. 公会議の権威は聖書の権威よりも下である。
18. ゆえに聖別された聖職者の失われることのない性格や聖体変化やそれに類したことを信じなくても、とうてい異端とはならない。
19. 獲得された信仰とは妄想である。

当時こうしたテーゼを堂々と主張することは極めて異例であり、とりわけ第18にある司祭制や彼らによるミサ聖祭の無効については、ルターですら1520年に『教会のバビロン捕囚について　マルティン・ルターの序曲』（De Captivitate Babylonica Ecclesiae Praeludium Martini Lutheri）のなかでようやく繰り広げた考えであり、センセーショナルなものであった。ルターは、これについて「大胆だが真実だ」と語っている[36]。司祭制やミサ聖祭というカトリック教会の2つの重要な機軸を、聖書を根拠として無力にしたことは非常にショッキングであった[37]。この点で「ルターから福音を学んだ」メランヒトンは、このとき師でもあるルター以上にルター的であったといえよう。また信仰とは神から与えられるものであり、人間が自らの意志や力によって獲得するものではないとも続けている。

こうしてメランヒトンは神学部に籍を移し、ここで教授として活動することになるが、給与は相変わらず学芸学部より支払われている[38]。神学部教授すなわち神学者、つまりルター神学に基づく宗教改革者として神学講義にも正式に携わることができる一方、人文学者としての従来の仕事にも存分に取り組めるという特別なポジションをメランヒトンは獲得したのである。ただし依然として当時の学則によればウルガタ訳聖書による聖書講義が義務づけられており、メランヒトンはマタイによる福音書や、1520年4月からは1年間ローマの信徒への手紙の講義を担当する。さらにルターがヴァルトブルクにいて不在のあいだも（代役として）継続してコリントの信徒への手紙を読解し、結局1523年3月のヨハネによる福音書まで続けられることになる。

ところで1508年からの学則によれば、センテンティアルスという聖書講義の次の段階に至るためには、メランヒトンがもっとも嫌悪するスコラ学の代表ともいえるロンバルドゥス（Petrus Lombardus, ca.1095-1160）の『命題集』（Sententiae）を取り上げねばならなかった。しかし彼のスコラ学に対する嫌悪の念は大きく、あえて上位に進むことはしなかった。その代わりメランヒトンは独自のテキストを編んでいった。それがルター神学の最初の教義学書といわれる『神学要覧』（Loci communes rerum theologicarum seu hypotyposes theologiae）通称『ロキ』であり、1521年に出版された。

この『ロキ』には「神による神秘を私たちは探究するというよりも正しくは賛美することになるだろう」（Mysteria divinitatis rectius adoraverimus quam vestigaverimus）と記されている[39]。ミステリアとはルター神学を学んだメランヒトンにとって要するに―行いによるのではなく信仰による―福音であり、その前提には律法が踏まえられている。律法と福音の区別は、ルター以上にメランヒトンが終生に渡って強調した重要ポイントであり、彼の思想の全体的構造を貫く最大の特質となっている[40]。信仰による救いの次元―「神の前」（coram Deo）の領域―に関わる福音と、人間社会や世界に生きる私たちが日々生活する次元―「人々の前」（coram hominibus）の領域―にも関わる律法とは、区別されると同時に、相互に関係しあわなければならない[41]。私たち人間には探究すべき世界が人間自身を含めて―自然学的にも倫理学的にも―目の前に無限に広がっている一方で、そうした世界とともに―神学的にも解明できない―神秘については、私たちはただ賛美するよりほかはないのである。約言すればメランヒトンにおいて、いわば科学と信仰、探究と賛美とは区別されつつも一体となっている。敬虔と学識（pietas et erudition）は決して矛盾しないのだ[42]。

さて宗教改革者としての核心を記した書物でもある『ロキ』は、やはり人文学者としての精神によって貫かれている。ギリシア語教師であるメランヒトンは初心者のために先のギリシア語の古典のみならず、やはり新約聖書からもテキストを採用しているが、なかでもローマの信徒への手紙に記されたパウロ思想をベースにして『ロキ』を執筆した。Loci（単数形でlocus：場所や地点）とはギリシア語のトポスつまり主題や要点という意味でもあり、それぞれの学問分野における主眼点や目標のようなものでもある[43]。はじめにメランヒトンは、こう述べている。

> というのは、〔命題集〕注解というより〔主要概念の〕インデックスを作成したいからです。聖なる書物の中をさ迷っている人たちがそこへと導かれるところの主要概念のカタログを作り、さらに、キリスト教の教理全体が依拠している事柄をわずかな言葉で告げ知らせたいのです。学生を聖書から曖昧

で複雑な議論へ呼び戻すためにこれをするのではなく、できることなら彼らを聖書へと招待するためです。なぜなら、わたしは全体に、注解なるものを、古代の注解といえども、これを評価しないからです[44]。

あくまでも聖書という原典および原点へと誘おうとする（ad scriptas invitem）のが『ロキ』のねらいであり、決して古来のような注解ではない。聖書という原テキストに立ち戻るために正確な位置（ロケーション）やポイントを示すのが、その名の通り『ロキ』の目的である。「キリスト教の本質を聖典である聖書以外から得ようとする者は誤っています」[45]。キリスト者にとってカノンとは聖書のみであり、アリストテレスに毒されたスコラ学や、オリゲネスやアンブロシウスにヒエロニムスらの注解―二次文献―ではないことをメランヒトンは重ねて強調している[46]。「われわれは聖書に精通したいと願う人々の努力をなんとしてでも促進させてあげたい、それ以外何も行いません」[47]。あくまでも「聖書と関わること」（in scripturis versari）、聖書そのものと関わる人々を育てることが『ロキ』のねらいなのである。

そこでメランヒトンは神や三位一体、人間の能力や罪など、合計23のトピックを掲げている。特に人間における罪（peccatum）や意志（voluntas）や情意（affectus）の問題についてはルター神学を忠実に踏襲し、後に改訂を重ねていく『ロキ』とは異なる若き日のメランヒトンの、ある意味でルター以上にルター的な宗教改革的認識が明示されていて興味深い[48]。またアリストテレスにも精通したメランヒトンであるが、そのアリストテレスを福音や救いの問題と関わらせることは厳しく戒められている。律法と福音とのあいだの区別は、アリストテレスの哲学が有効に機能できる次元―科学的かつ探究的次元―と、そうではない信仰の次元―神秘的かつ賛美的次元―との区別でもある。これもやはりメランヒトン思想の全体像を貫く構造的特質である。

メランヒトンは『ロキ』という組織的な神学的著作を晩年に至るまで改訂し続け、自らの思想発展の軌跡を今日の私たちに残してくれている。『ロキ』を用いることで彼は『命題集』を退けた。ゆえに神学博士の学位を取得することはなかったが、メランヒトン自身はまず人文学者としてギリシア語などの語学をはじめとする諸学芸や学問に携わることを快楽ならびに使命と感じていた。ここでは修士が最高学位であり、あえて学位のために嫌悪するロンバルドゥスの著作を扱う必要はなかったのである。1533年にはメランヒトンによって新たな学則が示され、もはやこれまでのような必要はなくなったが、もうメランヒトンはドクターの学位を望んではいなかった。彼は博士ではなかったが、すでに博士たちを作り出す立場になっていたのである（Er war kein Doktor, er machte Doktoren）[49]。

こうして人文学者メランヒトンのad fontesという絶対的要請は、神学者すな

わち宗教改革者メランヒトンの ad scripturam という絶対的要請とぴったり重なり合っていることが明らかとなったであろう。そもそも「宗教改革者たちは革新（Neuerung）を欲していたわけではなく、まさに言葉通り再 - 形成（re-formieren）、すなわちさかのぼって形成すること（zurück-formieren）（ラテン語で reformare つまり元の状態に戻すこと）を望んでいた。教会はキリスト教が最初にあった時代の状態に再び戻るべきである」[50] としたのであるから、これも当然である。人文主義は宗教改革を準備し、宗教改革はますます人文主義を必要としたのだ。メランヒトンは生涯を通じて、人間的なる教養（humanitas）においても神秘的な聖なるもの（divinitas）においても、ともに原典へと絶えず立ち還り、この原点において物事を探究しようとする衝動に駆り立てられていたといえるだろう。しかもディルタイがすでに指摘しているように、メランヒトンはその後の実験や観察など事物に即した自然科学の発展へ向けた萌芽ともなっている[51]。『自然学入門』には、こう記されている。

> すべての自然の事物は人間の知力にとっていわば劇場〔舞台〕のようなものである。神はこれら〔自然の事物〕が注視されることを望んでいる。それゆえに神は人間の精神に、これを考察しようとする熱望と、その認識に伴う喜びを与えたのである。この〔自然の事物の〕原因は健康な知力を自然の熟考へと誘う。たとえ何ら有用性が伴わなくても、見ることが〔人を〕楽しませるように、精神はその自然本性によって事物を注視することへと駆り立てられる。したがって、これ〔精神〕はこうした研究の原因となりうる。というのも自然を考察することは、その〔精神の〕自然本性に最大限に即応しているからであり、精神が自ら進んで考察することは、たとえ何ら他の有用性が伴わなくても、もっとも快い喜びをもたらすからである[52]。

こうした探究衝動はメランヒトンの根本的気質をともなっている[53]。むろん残されたミステリアについては賛美と祈りとを忘れてはいない。あくまでも「聖霊に導かれ、私たちの教育する学芸に伴われて、聖なるものへと来ることが許されるのである」（Duce Spiritu, comit artium nostrarum cultu, ad sacra venire licet）[54]。

3 節　メランヒトン思想の構造と特質

人文学者および宗教改革の神学者として活躍したメランヒトン。その業績は残された作品目録からしても極めて膨大かつ多岐に及ぶ[55]。そこで生涯に渡る実り豊かな活動成果よりメランヒトン思想の全体的な構造とその特質を浮き彫りにするには、はじめに残された作品をジャンル分けしておくのがよいであろう[56]。

1節で見たように、メランヒトンは何よりもギリシア語教師としてヴィッテンベルク大学に招聘された。メランヒトンの活動の第一は、言語や文学に関する教育や研究にある。文法そして修辞学や弁証法を介して人間的なる教養、さらには諸学問とりわけ神学へと進むツールとして、まず言語の訓練があげられねばならない。が、言語的トレーニングはメランヒトンにおいて同時に精神の思考能力や判断力の訓練ともリンクしていた。生徒や学生は、文法や修辞学といった三つの学芸のテキストから入り、ギリシア・ローマの古典古代作家の原典を読解するプロセスにおいて、精神的思考能力や判断力を形式陶冶されながら、古代人たちの内容豊富なフマニタスを実質陶冶されていく。これらはメランヒトンにおいて広く3種類の哲学に分類されている。

> 哲学は語ることの術（artes dicendi）〔弁証法・修辞学〕、自然学（physiologia）〔自然哲学〕そして市民の道徳に関する教え（praecepta de civilibus moribus）〔道徳哲学〕を内容としている。こうした学問〔学科〕は神による善き創造であり、自然のすべての贈り物のなかでも卓越している。しかも哲学は現世の身体的ならびに市民的生活にとって食べ物や飲み物や公の法とかいったものと同様に必要である[57]。

弁証法や修辞学は自由学芸（artes liberales）の重要な構成部分であり、文法とともに伝統的な三学（trivium）として知的探究すなわち学問研究の道具となる言語の修練と教育に深く関係している。次に自然哲学では、ルター神学から派生したメランヒトンの特異な思想が展開される。これは人間の現世での生活にとって必要かつ有用である。そして道徳哲学は市民道徳に関するまさに神の法（lex Dei）であるとされ、アリストテレスをルター神学の観点から変容・修正しつつ、ここにもメランヒトンならではの神学的哲学が見出される。これもやはり人間の現世での生活にとって必要かつ有用である。

すると人文学者としてのメランヒトンの活動成果より、次のようなジャンル分けが可能であろう。①文法、修辞学、弁証法といった言語に関するテキスト。これらはすべての学問および社会生活においても必要とされる土台である。次にこれをベースにした②自然哲学すなわち自然学に関するテキスト。そして③道徳哲学すなわち倫理学に関するテキスト。これら三つのテキスト郡に渡ってメランヒトンは数多くの作品を残している。メランヒトンにおいて一番の主要な活動とはヴィッテンベルク大学における教育であったから、これらテキストは文字通り日頃使用される教科書としても編まれ、メランヒトン自身の最新の研究成果を取り入れたI「組織的記述」（Systimatische Darstellung）となっている。

図１　人文学者・神学者メランヒトンの主な活動領域

①から③のジャンルにおいて、すでに見たように①については着任当初より個別の教科書が作成されていったとはいえ、たとえば②自然学における代表作としては『自然学入門』（Initia doctrinae physicae, 1549）があげられ、③倫理学における代表作としては『倫理学の基本概念』（Ethicae doctrinae elementa, 1550）があげられる。哲学とならんで神学者としてのメランヒトンの④神学における代表作としては、もちろん『ロキ』が筆頭にあげられねばならない。既述したように、これは 1521 年の初版から 1559 年の晩年に至るまで何回も改訂が重ねられてゆき、その遍歴のなかにメランヒトン神学思想の変化を辿ることができる[58]。ただし、いずれも組織的記述に至るまでにさまざま改版が重ねられ、また晩年に至るまで手を入れ続けていることに注意しなければならない。このように機会あるごとに改版を重ねて進化していくのがメランヒトン作品の特徴でもある[59]。

さて①を基盤にして②から④のジャンルにおいてメランヒトンの組織的記述としてのテキストを私たちは目にすることができ、ここから彼の思想の全体的構造を描きつつ（図１参照）、その特質を抽出してみることができるのであるが、しかしメランヒトンが残した作品はこれだけに止まらない。ad fontes へと駆られてメランヒトンは古典古代の作家たちの作品への人文学的な注解を数多く残している。これら II「古典注解」（Klassische Kommentare）もまたメランヒトン思想を知るための重要な資料となる。あわせて ad scripturam へと駆られてメランヒトンは聖書への人文学的な注解を数多く残している。これら III「聖書注解」（Biblische Kommentare）もまたメランヒトン思想を知るための重要な資料となる。ここからもメランヒトンは、あくまでも人文主義および人文学者として古典

と聖書との両方に原典において取り組むことで、この源泉から時代や社会の状況に応じた回答を引き出し、あるいは応答を求めながら、自己の中心に位置づく組織的記述としてのテキストを作成していったことが分かるであろう。さらに一例をあげれば自然学に関して、とりわけ解剖学や医学の分野で、当時としては最新であったヴェサリウス（Andreas Vesalius, 1514-1564）の『人体構造論』（De humani corporis fabrica, 1543）からも学び、その知見は『魂についての書』（Liber de anima, 1553）というテキストに反映されている[60]。また自らは天動説を固持したもののコペルニクスの作品も読んでいる[61]。フマニストとして古典や聖書に常に立ち還る研究を続けるなかで、当時のさまざまな新しい研究成果も取り入れつつ、宗教改革の怒涛と波乱の世の中に対してレスポンスしていったのがメランヒトンであり、その結果が残された膨大な作品群なのである。つまり彼の作品を正確に読み解くには、当時の社会やメランヒトンを取り囲む状況といったマクロかつミクロなコンテキストをも考慮に入れる必要がある。時代と社会の文脈のなかでメランヒトンは、自己の内側からも外側からも都度ごとにニーズを感じ取りながら筆を執ったからである。

ゆえにメランヒトンが残した業績は、その形式から見てⅠ「組織的記述」、Ⅱ「古典注解」、Ⅲ「聖書注解」だけに尽きはしない。他にもやはり膨大な数に及ぶ手紙、演説、そして教理問答、教会規則、学習計画やカリキュラムの提案、勧告、助言、説教などが加わる。とりわけ時機に応じて書かれ話されたⅣ「演説」（Reden）には、そのときのメランヒトンの考えがコンパクトに分かりやすくまとめられている。先の『青年の学習改善について』は、その代表作としてあげられよう。またⅤ「教理問答（カテキズム）」（Katechismen）はメランヒトンのキリスト教教育思想を知る上では重要な資料となる。これもまた時機に応じてさまざまな版が出されている[62]。

以上より、メランヒトン思想の全体は残された作品の形式からすれば、およそⅠを両脇から固めるⅡとⅢがコアを形作り、これを囲んでⅣとⅤなどの業績から描くことが可能であろう。まとめてみよう。

Ⅰ組織的記述……①文法、修辞学、弁証法に関する著作（『ギリシア語文法の原理』など） ②自然学に関する著作（『自然学入門』『魂についての書』など） ③倫理学に関する著作（『倫理学の基本概念』など』 ④神学に関する著作（『ロキ』）
Ⅱ古典注解……②自然学に関する著作（アリストテレスの『魂についての注解』など） ③倫理学に関する著作（アリストテレスの『ニコマコス倫理学第１巻への注解』など）
Ⅲ聖書注解……④神学に関する著作（『コロサイの信徒への手紙注解』など）
Ⅳ演説……①文法、修辞学、弁証法に関する著作（『青年の学習改善について』など）

②自然学に関する著作（『自然学について』など） ③倫理学に関する著作（『哲学について』など） ④神学に関する著作（『神学の学位について』など）
Ⅴカテキズム……③④あわせて倫理学ならびに神学に関する著作（『子どものカテキズム』など）

メランヒトンが人文学者として活躍した領域、つまり①言語、②自然学、③倫理学、要するに哲学に関わる作品と、神学者として活躍した領域、つまり④神学、そのまま神学に関わる領域が、彼の生涯を貫徹する研究と教育の二大領域とするならば、この両領域を包括してここでキリスト教教育者としてのメランヒトンが活躍した領域、つまり教理問答（カテキズム）に関する領域が加えられなければならない。これを⑤カテキズムとしよう。これら五つの領域から、また形式的にも五つに分類された作品から、メランヒトンの思想構造が以下のように描かれるであろう。

図２　メランヒトン思想のコアを形成するもの

すなわち基盤には①言語があり、またその上に②③と④の領域が区別されつつも同時にあり（図１参照）、それらはともに ad fontes を基本に ad scripturam を伴う注解による研究を原典に即して進めながらテキストという組織的記述に凝縮されていく（図２参照）。これがメランヒトンの人生の日常スタイルであり、単純化すればアカデミズムのなかで哲学と神学の研究と教育に生きたコアとなる部

分である。ところがドイツの教師としてのメランヒトンはそこに止まらず、広くキリスト教教育の分野でもカテキズムを通じて影響を及ぼしていく。つまり①から④をさらに中心として家庭でも敬虔な教育者としての人生を歩んでいる（図3参照）。大学での仕事のみならず、ある時期まで自宅に学生を住まわせて私塾（schola privata）を営んでいたメランヒトンにとって[63]、じつはカテキズムなどに見られる普段の教育者としての姿からも、彼の思想を身近に読み取ることができる[64]。これら全体からメランヒトン思想は形成されていて、その構造の根底には、すでに触れてきたように律法と福音との区別がある。とりわけ大学および私塾において日常的な教育者・研究者として生きたメランヒトンのコアとなる姿から、今後はメランヒトン思想の要として、特にその教育思想に注目したい。

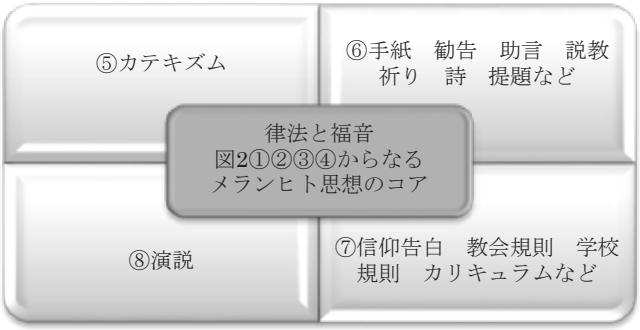

図3　メランヒトン思想のコアから⑤、さらなる作品

つまりメランヒトンの思想全体は、①に裏付けられた研究・教育活動がベースにあり、ここから律法と福音の区別を構造的特質として一貫して保ちながら②③④の成果を生み出し、それらは⑤という普段の教育の領域で再び日常へと循環する構造を持つ。さらに時機に応じて演説や手紙なども記され、教育の制度化のために数多くの学校規則やカリキュラムも提案している（⑥⑦⑧の作品群）。要するに教育と研究を人生の要として生きたメランヒトンにおいて、その教育思想はメランヒトン思想全体の中心に位置していると見なされてよいであろう[65]。本稿ではそこに至るまでの概念的見取り図を描いてみた。

おわりに

今後メランヒトンの教育思想へと本格的に迫っていくには、いうまでもなく教育が他ならぬ人間の教育である以上、メランヒトンの人間学が解明されねばならないが、別稿に譲るとしよう[66]。メランヒトンの人間学を踏まえた上で、いよいよ先にあげたジャンルに属する作品を、外的な当時の時代や社会というマクロな視点と、あわせて内的なメランヒトン自身のミクロな視点から照射しながら、律

法と福音という構造的特質の下で丁寧に読解していくとき、ここに彼の教育思想の全容が、メランヒトン思想全体の要として明確な形をとって浮上することになるであろう。メランヒトンの残された膨大なテキストのなかから、その歴史的時期に応じて代表的なものを取り上げ、そこからまずは教育思想の全体的なデッサンを描くことが、次の課題である。

<註>

1　オーバーマン『二つの宗教改革―ルターとカルヴァン―』日本ルター学会・日本カルヴァン研究会編訳、教文館、2017 年、参照。
2　ユング『宗教改革を生きた人々―神学者から芸術家まで―』菱刈晃夫・木村あすか訳、知泉書館、2017 年、v-vi, 頁。
3　ユング『メランヒトンとその時代―ドイツの教師の生涯―』菱刈晃夫訳、知泉書館、2012 年、参照。
4　金子晴勇『宗教改革の精神―ルターとエラスムスの思想対決―』講談社学術文庫、2001 年、参照。
5　拙著『ルターとメランヒトンの教育思想研究序説』溪水社、2001 年、153 頁以下参照。Cf. Scheible, Heinz : Melanchthon und die Reformation. Forschungsbeiträge. Mainz 1996. S.171ff.
6　Cf. Scheible, Heinz : Aufsätze zu Melanchthon. Tübingen 2010. S.1ff.
7　フマニスト、英語ではヒューマニストは人文学者もしくは人文主義者と訳される。Humanismus, Humanisme という用語は 19 世紀初めに作り出された言葉であるが（拙著『習慣の教育学―思想・歴史・実践―』知泉書館、2013 年、202 頁以下参照）、ヒューマニスト（humanista）という用語は 15 世紀末のイタリアにさかのぼり、16 世紀のあいだに一般に用いられていた（クリステラー『イタリア・ルネサンスの哲学者』佐藤三夫監訳、みすず書房、1993 年、224 頁以下参照）。それは人文学すなわち studia humanitatis の教師と学生を意味していた。ストゥディア・フーマーニターティス（人文学）とは、15 世紀より、文法、修辞学、詩、歴史、および道徳哲学という五つの学科を含み、ここから派生して、これらの学科を職業的に代表する者たちがヒューマニストと呼ばれた。詳しくは、根占献一『フィレンツェ共和国のヒューマニスト―イタリア・ルネサンス研究―』創文社、2005 年、33 頁以下参照。
8　ユング前掲『宗教改革を生きた人々』、27 頁参照。Cf. Junghans, Helmar : Der junge Luther und die Humanisten. Wemar 1984. Beyer, Michael / Wartenberg, Günther (Hg.) : Humanismus und Wittenberger Reformation. Festgabe anläßlich des 500. Geburtstages des Praeceptor Germaniae Philipp Melanchthon am 16. Februar 1997.

Leipzig 1996.

9　同上書、4 頁参照。

10 主に次を参照。ユング前掲『メランヒトンとその時代』、シャイブレ「メランヒトン」菱刈晃夫訳（日本ルター学会編訳『宗教改革者の群像』知泉書館、2011 年、329-369 頁）。Scheible, Heinz : Melanchthon. Vermittler der Reformation. Eine Biographie. München 2016.

11 ユング前掲『宗教改革を生きた人々』、55 頁参照。Cf. Ibid., S.17f.

12 Ibid., S.13-14.

13 Cf. Ibid., S.17.

14 シャイブレ前掲論文、368 頁参照。Cf. Ibid., S.19.

15 Cf. Ibid., 19ff.

16 Cf. Ibid., S.26, Kuropka, Nicole : Melanchthon. Tübingen 2010. S.20.　シャイブレ前掲論文、333 頁参照。

17 Cf. Scheible, Heinz : Philip Melanchton(1497-1560). S.68. In : Lindberg Cater (ed.) : The Reformation Theologians. An Introduction to Theology in the Early Modern Period. Oxford 2002. Wengert, Timothy J. : Humann Freedom, Christian Righteousness. Philip Melanchthon's Exegetical Dispute with Erasmus of Rotterdam. Oxford 1998.

18 Cf. Kropuka, Nicole : Philipp Melanchthon. Wissenschaft und Gesellschaft. Tübingen 2002. S.13.

19 Cf. Ibid.

20 Cf. Scheible, op.cit. Melanchthon, S.24-33.

21 ユング前掲『宗教改革を生きた人々』、200 頁以下参照。

22 Scheible, Heinz : Philipp Melanchthon, ein Theologe der Reformation. S.136. 注 16 のシャイブレ論文をドイツ語版にして拡充したものより。シャイブレ博士より PDF で送付いただいた。また貴重なご教示を多くいただいた。記して心より感謝申し上げる。Cf. Scheible, op.cit. Aufsätze zu Melanchthon, S.4ff.

23 拙稿「メランヒトンの大学教育改革―再洗礼派との対決のなかで―」（日本キリスト教教育学会編『キリスト教教育論集』第 18 号、2010 年）、参照。

24 Cf. Junghans, op.cit., S.63ff.

25 Cf. Scheible, Heinz : Der Bildungsreformer Melanchthon. S.97. In : Asche, Matthias / Lück, Heiner / Rudersdorf, Manfeld / Wriedt, Markus (Hg.) : Die Leucorea zur Zeit des späten Melanchthon. Institutionen und Formen gelehrter Bildung um 1550. Leipzig 2015.

26 Ibid.

27 よく知られているように、たとえば聖書にしても「そのヒエロニムスの版には、しばし

ば注解、評釈がついていて、比喩的・寓意的・神秘的解釈で本文を補足し、文字どおりの意味は、一般に認められた伝統的釈義の中に埋もれた感がある。中世のどの時期にも、人びとの頭は、聖書の本文の語句や言及だけでなく、それぞれの句が含みとして持っている寓意や神秘性でいっぱいだったのである」（ハスキンズ『十二世紀世紀のルネサンス―ヨーロッパの目覚め―』別宮貞徳・朝倉文市訳、講談社学術文庫、2017年、78頁）。

28 以下所収『青年の学習改善について』より。Philippi Melanthonis Opera quae supersunt omnia, hrsg. v. Carl Gottlieb Bretschneider und (ab Bd.16) Heinlich Ernst Bindseil, 28 Bde., Halle und (ab Bd.19) Braunbschweig 1834-1860, ^{2}Frankfurt/Mein 1963 (Corpus Reformatorum 1-28). 本稿では略号CRの後に巻、頁を示す。CR11, 18.

29 拙稿「メランヒトンにおける教育の原理と実践」（東京神学大学神学会編『神学』第79号、2017年、136-161頁）、参照。

30 中世においてギリシア語は衰退していた。ハスキンズ前掲書、271頁以下参照。

31 Stupperich, Robert (Hg.) : Melanchthons Werke. Bd.III. Gütersloh ^{2}1969. S.33.

32 Cf. Scheible, op.cit. Melanchthon. S.40.

33 ユング前掲『宗教改革を生きた人々』、57頁参照。

34 同上書、56-57頁参照。

35 Stupperich, Robert (Hg.) : Melanchthons Werke. Bd.I. Gütersloh ^{2}1983. S.24.

36 Ibid., S.23.

37 Cf. Scheible, op.cit. Philipp Melanchthon, ein Theologe der Reformation, S.137.

38 シャイブレ博士より私信にてご教示いただいた。重ねて感謝申し上げる。

39 CR21, 84.

40 Cf. Kusukawa Sachiko : The Transformation of Natural Philosophy. The Case of Philip Melanchthon. Cambridge 1995. S.27ff. Scheible, op.cit. Aufsätze zu Melanchthon, S.241ff.

41 拙著前掲『ルターとメランヒトンの教育思想研究序説』、175頁以下参照。

42 Cf. Jung, Martin H. : Frömmigkeit und Bildung. Melanchthon als religiöser Erzieher seiner Studenten. In : Frank, Günter / Lalla, Sebastian (Hg.) : Fragmenta Melanchtoniana. Zur Geistesgeschichte des Mittelalters und der frühen Neuzeit. Bd.1. Heidelberg 2003.

43 クライン他編『キリスト教神学の主要著作―オリゲネスからモルトマンまで―』佐々木勝彦他訳、教文館、2013年、157頁以下参照。

44『宗教改革著作集』第4巻、教文館、2003年、176頁。

45 同上。

46 前注27参照。

47 前掲『宗教改革著作集』、177頁。

48 拙著前掲『ルターとメランヒトンの教育思想研究序説』、143頁以下参照。

49 シャイブレ博士からの私信より。

50 ユング前掲『宗教改革を生きた人々』、27-28 頁。

51『ディルタイ全集』第 7 巻、法政大学出版局、2009 年、181 頁以下参照。

52 CR13, 189.

53 メランヒトンの知的好奇心によって手がけられた学問分野はじつに幅広い。Cf. Bauer, Barbara (Hg.) : Melanchthon und die Marburger Professoren (1527-1627). Marburg 2000.

54 Stupperich, op.cit. Bd.III. S.40.

55 Cf. Claus, Helmut : Melanchthon-Bibilographie 1510-1560. 4Bde. Gütersloh 2014.

56 Cf. Kuropka, Nicole : Melanchthon und die Ethik. In : ZThK 113. 2016. S.235-257. 以下の分類に関しては、ここから多大な示唆を得ている。

57 CR12, 689.

58 Cf. Scheible, op.cit. Philipp Melanchthon, ein Theologe der Reformation, S.139. とくに 1535 年、1543 年に大きく改訂されている。あわせて拙著前掲『ルターとメランヒトンの教育思想研究序説』、145 頁以下参照。

59 メランヒトンが作成もしくは編集した教科書（Lehrbücher）の一覧としては次を参照。Leonhardt, Jürgen (Hg.) : Melanchthon und das Lehrbuch des 16. Jahrhunderts. Rostock 1997. S.231ff.

60 アリストテレスの De anima の注解は、すでに 1540 年に Commentarius de anima として出版され、この Liber de anima はその集大成となっている。Cf. Kusukawa, op.cit., S.75ff. さらに詳しくは次を参照。 Salatowsky, Sascha : De Anima. Die Rezeption der aristotelischen Psychologie im 16. und 17. Jahrfundert. Amsterdam 2006. S.69ff.

61 ユング前掲『メランヒトンとその時代』、210 頁以下参照。

62 拙著『近代教育思想の源流―スピリチュアリティと教育―』成文堂、2005 年、165 頁以下参照。

63 Cf. Stempel, Hermann-Adolf : Melanchthons pädagogisches Wirken. Bielefeld 1979. S.39ff. Koch, Ludwig : Philipp Melanchthon's Schola Privata. Ein historischer Beitrag zum Ehrengedächtniss des Präceptor Germaniae. Gotha 1859.

64 Cf. Supplementa Melanchthoniana. Bd.5/1. Leipzig 1915. Jung, Martin H. : Frömmigkeit und Theologie bei Philipp Melanchthon. Tübingen 1998.

65 こうした観点からメランヒトンを捉えた代表的業績として、Stempel, op.cit. および Hartfelder, Karl : Philipp Melanchthon als Praeceptor Germaniae. Berlin 1889. がある。

66 拙稿「メランヒトンの人間学に関する一考察―教育思想の基礎としての人間学―」（国士舘大学初等教育学会編「初等教育論集」第 18 号、2017 年、1-27 頁）、参照。

本稿は2016年度「学外研修研究員」としてゲッティンゲン大学にて行った研究―「宗教改革期ドイツにおけるメランヒトンの人間学と教育思想の解明」―成果の一部である。